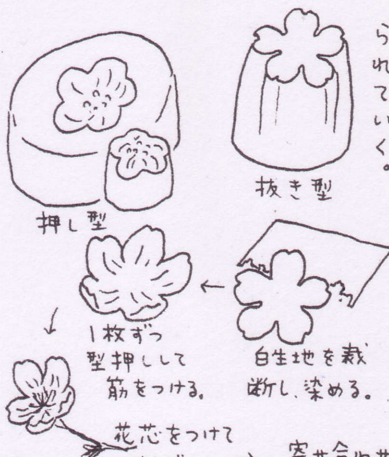


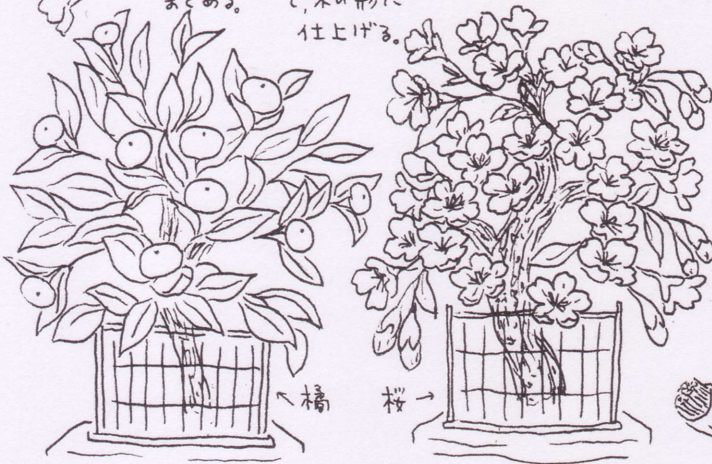
# 枝ぶりも色も自由自在 人形の名脇役



日本人形用造花職人  
3代目 岡田 雄二さん



お雛様に欠かせない「桜・橘」「紅白梅」などの造花は、人形をさりげなく引き立てる大切な役目。小さな中にも細部まで工夫を凝らし、手間をかけ、ひとつひとつ手作りで作られていく。



五月人形用の「鮮やかな色も」

材料はすべて自然素材。蕾や実には綿を入れて、木の肌や苔もリアル。花はワラ。

イラスト◎イソノヨウコ

おかだゆうじ  
**岡田雄二さん**  
祖父が浅草で商売を始めまして、自分で3代目です。雛人形の飾り花が中心だったようですが、今はそれだけじゃつまらないので、ミニ盆栽や、壁掛けなども作っています。技術を忘れないためにも、いろんな試作品に挑戦するんです。  
岡田雄二  
〒048-8822・82994

雛壇に飾られている桜・橘のほかに、日本人形と一緒に置かれている花なども作っています。と言われても、お雛様を見たとき、花は印象に残りませんよね。お客さんは花だけを買うことはありませんので、私たちは人形屋さんとして、花の種類や大きさについてやりとをするだけです。商品に人形作家の名前は出していない、私たちの仕事は表に出ませんから。

でも、同じように見えている花も、合わせる人形のお値段によって、細工の程度を変えています。花部分なら、まず、白い布を裁断し、型で抜いて染色し、型で押し、型で抜いた凹凸を出すところを、お値段の張る花は、1枚1枚手で筋をつけて曲げているんです。絵や平面のものとは違って、立体の花は後ろから見えますから、ごまかしがききません。図鑑だけではそのへん、わからないので、よく本物を見て観察しますよ。

型を抜く機械だけは動力を使っていますが、染め、型押しから接続まですべて手作業。型抜きも、小さいものは手を切りやすいため木槌で叩いて抜いています。細かいものほど作業は大変で、1センチ以内の花など、型を抜いた後、保存用に重ねて輪ゴムを掛けるの

に一番時間がかかるくらい。茎の部分は針金に1本1本布を巻き、木の幹や苔の部分はおがくずを染めたものを糊で付けて、ざらざらした感じを出します。そうしてできた部分をまとめてひとつにしていくわけですが、設計図みたいなものはあっても、基本的な枚数などを書き留めてあるだけで、形はそのつど見ながら生け花のように形よくまとめていくわけです。

盆栽展や写真集などを参考にすることもありますが、一時自分も育てましたが、枯らしてしまいました。盆栽では、木に針金をまいたりして何年も掛けてゆっくり曲げていかなきゃいけないのに、強い強引に作ろうとしてしまう。やっぱり造花のほうが、自分の狙った形にできるからいいですね。

趣味で作品として1個作るぶんには楽しいですけど、われわれは職人ですから、何百何千と同じものを作らなければいけませんし、納期もある。1枚の布から型を抜いていくのも、できるだけ無駄の出ないように考えてやらなきゃいけない。ひたすら辛抱ですね。工賃の安い海外に外注する業者も多いようですが、技術が失われてしまいますから、丁寧にひとつひとつ作り続けているんです。